

「第二次日本経穴委員会」便り

～第7回 閑話休題～

第二次日本経穴委員会作業部会委員 こばやしけんじ 小林健二

作業部会は、昨年12月12日と本年1月16日に、非同意穴の宿題検討を行いました（第8回、第9回部会）。詳しい検討内容は次回以降に詳説します。今回の便りは少し趣を変え経穴、経穴書についての若干のお話をしたいと思います。

最古の経穴名資料

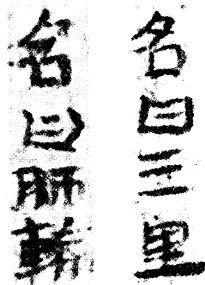
『武威漢代医簡』をご存じだろうか？ 中国の出土資料として1972年、甘肅省武威の旱灘坡漢墓の木棺中から発掘された木簡78枚、木牘14枚のこと（合計92枚）であります。時代は副葬品等から後漢早期のものとして推定されています。特徴は、この墓の中にあつた木簡は医薬に関するものばかりであつたということ。内容は、病名、症状、製薬方法、鍼灸治療方法などが書かれています。この中に経穴としては、はじめて「三里」「肺俞」の名が出てきます（写真参照）。内容は「寒氣が胃に入り腹が張る」というような症状に「三里」「肺輸」を使いなさいと書かれています。

取穴位置について

では、三里は「膝下五寸の分間」とあり、肺俞は「項の上から、下ること十一椎、椎を扶むこと両」とあります。『鍼灸甲乙経』では足の三里は「在膝下三寸」ですから五寸は少しおかしいのでは？ 肺俞は「在第三椎下兩傍、各一寸五分」ですから、これもちょっと疑問です。11椎ですから『鍼灸甲乙経』で言う「在第十一椎下兩傍各一寸五分」の脾俞ではないかと考えられます。しかしこれを誤記と考えるか、その当時の、その地域の鍼灸流派のある一派の誤りのない正しい教科書であつたか？ 答えはさらなる出土文物資料を待つしかありません。ただ漢代はまだ鍼灸医学の開花の時代であるゆえ、穴名にしても、部位にしても混乱はあつたと思います。まだまだ経穴学としてまとまるまでには、これから数百年後を要します。

経穴書の成立前

1972年、奇跡的な保存状態で発見された女性のミイラと、豊かな副葬品によって、世界的なセンセーションを巻き起こした馬王堆漢墓。今から約2200年前の前漢初期のこの文物は特に医学文献を研究する人達にとっては、まさに超お宝級の発見でありました。副葬品には医学内容が書かれた帛書があり、「足泰（太）陽脈」というような11の経脈走行と病証が書かれてある



『武威漢代医簡』
文物出版社・1975年

ものの経穴名はありません。

前漢の司馬遷が書いた歴史書『史記』(BC90頃成立)にある『扁鵲倉公列伝』はどうでしょうか？ 尸厥という病（仮死状態のようなもの）を扁鵲は「三陽五会」というところに鍼をしたら蘇ったという記述があるのみで、今の何の経穴名かは不明です。治療は、「××の時は足の少陽脈に灸」等の表現でしか書かれていません。

経穴書の成立

国家が統合・安定してくると政治、経済、文化の整理が行われます。図書の整理事業も行われました。全国各地にある書籍が国家事業として収集されていくわけです。後漢の班固が『漢書芸文志』を著したのが紀元80年頃です。『黄帝内経』等医経・経方・房中・神仙の書が全国から集められ整理され目録に著されています。

その中に「・・明堂」と称される経穴書はありません。次の時代の『隋志』新・旧『唐志』に初めて「明堂流注」「明堂孔穴図」「黄帝明堂経」「黄帝明堂」「黄帝内経明堂類成」等が出てきます。目録から、後漢の時代から経穴の研究は独立した形で学としてまとめられてきたことが窺えます。唐初にいたって、経穴書『明堂』は唐令で医学教科書に挙げられています。

黄帝内経明堂

『黄帝内経明堂』は現存していません。ただ唐初の楊上善が『明堂』を注解した『黄帝内経明堂類成』（一三巻）は巻一のみですが日本に写本として残っています。その内容を見てみるといかに整理されてきたかがわかります。肺経の冒頭に「中府者、肺募也。一名膺中輪。在雲門下一寸。乳上三肋間。動脈應手。陷者中。手足太陰之會。刺入三分。留五呼。灸五壯。主。肺系急。欬。胸中痛。惡清。……」とあるよう

に、経穴の性格、別名、部位、鍼灸方、刺激量、主治症が述べられています。別名があるのは、当時の異本の収集・整理をした証拠でもあります。

亡失した『明堂』は3世紀の皇甫謐著『鍼灸甲乙経』、孫思邈（581～682）著『千金方』、王燾（670?～755）著『外台秘要方』、日本・丹波康頼（10世紀）『医心方』にも内容は引かれているので窺い知ることはできます。

『明堂』復元書として、黄龍祥『黄帝明堂経輯校』中国医薬科技出版社（1987）、桑原陽二『経穴学の古代体系—明堂経を復元する』續文堂（1991）、小曾戸丈夫『黄帝内経明堂—鍼灸経穴学原典の臨床応用—北里研究所東医研医史学研究部刊（1999）』があります。

銅人腧穴鍼灸図経

『銅人腧穴鍼灸図経』3巻は北宋の医官・王惟一が仁宗の命を受け天聖4年（1026）に編纂したものです。この書は宋代の鍼灸教科書であり、また宋以後の鍼灸学に大きな影響を与えました。成書の背景には、やはり当時の経穴書の混乱と亡失がありました。宋の太宗は医学を好み、大量の医書を所蔵していました。唐代政府がかつて何度も修訂した鍼灸經典『明堂経』はこのときすでになく、宋太宗は集書を命じたが結局得られませんでした。そのため、天聖年間、仁宗は当時の鍼灸教育、および鍼灸臨床の需要に応じられるよう、医官王惟一に失伝した『明堂経』に替わる、まとまった形の鍼灸腧穴經典の編集を命じたのです。この本の選定後、銅製の人体模型が鑄造され、あわせて本の刊行、石刻という紙、銅、石の3種類の素材を用い伝えようと努力しました。

（〒356-0031 埼玉県上福岡市中央1-6-2）